

6) thakrap

7) Samiñ モン族の称号で「主君, 国王, 帝王」などの意味をもつ。

8) Samiñ Ay:paray: ただし, マンナン・ヤーザウィンでは, Samiñ Jippray: となっている。『Hmannan:』 Vol. I, p.445

なお, この稿につき門司市世界平和パゴダ僧院在住ウー・ウェーブッラ僧院長, およびウー・ヴィッジャーナンダ長老に種々ご教示いただいたことを明記し, 深甚の謝意を表します。

「信を發こせ」再考

—Pamuñcantu saddham—

村 上 真 完

(東北大学教授・文博)

一 は じ め に

仏が悟りを開かれた直後に, 自分の悟った理法 (dhamma) が, 深遠で人々には理解されない, と思って説法を躊躇したという。そこに, 梵天が現れて説法を請う (これがいわゆる梵天勧請である)。それに対して仏が答えたという詩節 (偈) の中に, この語句が出ている。すなわち

apārutā tesam amatassa dvārā ⁽¹⁾

ye sotavanto pamuñcantu ⁽²⁾ saddham

vihiṃsa-saññī paṇḍitaṃ na 'bhāsim ⁽³⁾

dhammaṃ paṇitaṃ manujesu Brahme ti ⁽⁴⁾

(*Vin.* I p.7⁴⁻⁷, *D.* II p.39²¹⁻²⁴, *M.* I p.169²⁴⁻²⁷, *S.* I p.138²²⁻²⁵)

(1) [Brahme] を加える *M.*

(2) pamuccantu *S.*

(3) na bhāsim *S.*, *M.*, n'abhāsim *D.*, na bhāsi *Vin.*

(4) Brahme 'ti *Vin.* (書名略号は村上・及川『仏のことば註』(一)に従う)。

筆者は, これを次のように解する。

『彼等に不死 (甘露) の門が開かれた。およそ誰でも耳ある人達は, 信を發こせ (寄せよ)。

〔自ら〕煩わしき (傷つくこと) を想って, [私は自ら] よく知っているすぐれた (微妙な) 法をば, 人々に説かなかったのだ。梵天よ。』

この解釈は, パーリの註釈書類の説明と, 諸の漢訳の伝承 (訳例) ととも一致している。しかし, この詩節の解釈は, 110 年以上の間未だ決着を得なかったかの如くである ⁽¹⁾。

最近も, 中村元『ゴータ・ブッダ』I (中村元選集 [決定版] 春秋社, 1992

年）p.449は、こう訳している。

「耳ある者どもに甘露（不死）の門は開かれた。

「おのが 信仰を捨てよ。梵天よ。人々を害するであろうかと思って、わたくしはいみじくも絶妙なる真理を人々には説かなかつたのだ。」（波線は筆者）
この中、波線部の訳文に問題がある、と筆者は今も考える。筆者は、そこを「信を發こせ（寄せよ）」「〔自ら〕煩わしき（傷つくこと）を想って」と改めなければならないと考える。

実は既に筆者は『スッタ・ニパータ』（*Sutta-nipāta*, Sn.1146）の解釈に付随して、上のように解する私見を公表し議論した（『仏教論叢』第32号、昭和63年9月、pp.63-67、村上真実・及川真介『仏のこことば註』（四）、春秋社、1989年、10月、pp.181-189、『仏と聖典の伝承』春秋社、1990年2月、p.54）。

しかしその後、本年（1992年2月）になって、中村元教授は上掲の『ゴータマ・ブッダ』Iを公刊して、拙論の趣旨に反論し、また仏教思想研究会編『仏教思想11 信』（平楽寺書店、1992年5月）の第一章にも「〔信〕の基本的意義」という論文を載せて自説を展開している。このような解釈（見解）の相違は、ただ一句の一語の解釈に関する問題ではあるが、原始仏教の信の原意を追求する上では看過すべきことではないであろうし、この一句の解釈を決定することによって、仏教の信の最も本質的なところが明らかになるはずである。ここで筆者は自説を補強して中村元教授に応えて、この110年余にわたる問題について決着をつけることが、目下の責務であろうかと考えるにいたった。

中村教授は問題の語句を、以前から「〔おのが〕信仰を捨てよ」（『ゴータマ・ブッダ（釈尊伝）』法蔵館、昭和33年、p.120）と訳しており、また最近「かれらは（各自の）信仰を捨て去れ」（『信』p.25）とも訳す。そして次のように論ずる（『ゴータマ・ブッダ』I 決定版 pp.462-463）。

「pamuñcassu saddham という句の意味に関して最近学会の一部ではその句は「信を寄せよ（発こせ）」という意味であるという主張がなされている。その論拠は、註釈文献（パーリ語）と漢訳にそのように解釈されているからであるという。しかしこの解釈には賛成しかねる。理由は、(1)インドのサンスクリット文献では pramuñcati とあれば、『リグ・ヴェーダ』以来「捨て去る」「放棄する」という意味であり、少し遅れた文献では「ゆるめる」「自由にする」ことを意味し、pramucyate (passive) とあれば「消えてなくなる」ことをいう。このことは、ベートリング・ロート、モニエル・ウィリアムズ、アープターなど諸辞典の一致している語義である。(2)「信仰を發せ」（起信）ということは、後代の仏教においてさかんに説かれるが、前掲

の語句またはそのサンスクリット形である pramuñcasva śraddhām という語形は、一般仏典のうちに出てこない。また一般のサンスクリット文献にも見あたらない。異様な表現なのである。そういう場合には他の表現を用いた。(3)梵天がゴータマ・ブッダにこのように語ったときには、転法輪以前であり、まだ「仏教」というものは成立していなかった。たがら「従前からの信仰を捨て去れ」というので文脈がうまくつながる。(4)ところが後代の教義学者たちは歴史意識というものをもたなかった。そこで仏典のうちに「信仰を捨てよ」という文句があるのにとまどいを感じ、こじつけた解釈をしたのである。(5)つじつまを合わせるといことは現代でも行なわれている。権威ある仏教学者の訳のいくつかを見ると、原文から離れて、当たり障りのないような訳をつけている。以上の諸理由によって、わたくしは宇井博士などの原文直訳を支持する次第である」。

要するに、この意味は「信を發こせ」ではなくて「信仰を捨てよ」である、というのである。その理由は5項にまとめられているが、(1)のサンスクリット文献では、pramuñcati は、『リグ・ヴェーダ』以来、「捨て去る」「放棄する」という意味である、と言う点が最大の理由であると考えられる。次の四つの理由は、「信を發こせ」という解釈は、要するに後代の解釈である、ということに尽きるのであろう。実はこの二つの点が問題だと筆者は考える。なお後者の理由によれば、漢訳等の伝承も、ブッダゴーサ（Buddhaghosa、5世紀）の註釈の解釈も、全然考慮するに及ばないかの如くに聞こえる。しかし慎重な同教授は、その前にブッダゴーサにも漢訳例やサンスクリット文の併行例についても言及しているのである。そしてまず（同p.461註34に）

「ブッダゴーサによると、sabbe attano saddham pamuñcantu, vissajjantu (Spk.p.203)。当時の諸宗教に対する信仰を捨てよというのであろう。ところが漢訳（あるいはその原本——パーリ文よりも遅れて成立したらしい）では、「聞者得篤信」と訳して正反対の意味に解している（『増一阿含經』第一〇卷、大正蔵、二卷、五九三ページ中）。つまり後世に仏教教団の威信が確立すると、信仰を強調することが必要となったのであろう。このような変化はサンスクリット諸原典との対比によっても確かめられる。」（下略）

云々と論ずる。ここには二つの問題がある。一つは、ブッダゴーサの註釈は中村元教授の解する通りなのか。筆者は上引のパーリ文を『皆、自分の信を發こせ、發せ（寄せよ）』と解する（それについては、後で再び詳論したい。）

次の問題は、「信を發こせ」というような解釈は後世における変化であろう、

という見方が、はたして成立するのか、ということである。同教授はこの趣旨に簡単に論及しているが、そのことも改めて検討しなければならない。

最後の問題は、思想史上、最も重要であるが、その前に、第一の pramuñcati の語意と用例の検討と śraddhā (パーリ saddhā) の語意と用例の検討が、まず必要不可欠な手順であろうかと思う。

二 pramuñcati (prā√muc, パーリ pamuñcati) の意味と用法

(1) prā√muc の用例 (ヴェーダ文献を主として)

中村元博士はこの動詞の意味を、上述のように、「捨て去る」「放棄する」「ゆるめる」「自由にする」などと示して、辞典 (O.Böhtlingk u. R.Roth, Monier Monier-Williams, V. S. Apte など) の名を挙げて、それらの一致している語義である、という。しかし、それは、実は正確ではないようである。

まず pramuñcati は √muc という語根に pra という前綴 (接頭辞 prefix) がついた語の変化形 (活用形) である。一般に語根の意味が接頭辞によって限定をうけて、語根の意味とは多少異なった意味や用法を示すようになる。しかし語根の意味が全く意味をもたなくなることはない。いま

(a) O.Böhtlingk u. R.Roth, *Sanskrit-Wörterbuch*, St Petersburg, 1855-75, 名著普及会 1976 (PW と略)

(b) V.S.Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised & Enlarged Ed., Poona 1957~59, 臨川書店 1978 (Apte と略)

(c) 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』(duṣpradharṣa 以降は辻直四郎監修) 昭和 15~18, 39~49 年, 増補改訂版, 講談社 昭和 54 年 (『梵和大辞典』と略) によって √muc (muñcati, muñcate) の語意と用法を整理して示してみよう。

1. [牛 (dhenu) を (acc.)] 放つ, [鳥 (pakṣin) を 籠の束縛 (pañjara-bandhana) から (abl)] 放つ, 自由にする

[船 (nau) を] 放つ, 自由にする

[衣 (vastra) を] 脱ぐ

[衣の端 (vastrānta) を] 離す

[咽喉 (kaṇṭha) を] 自由にする (= 話す)

2. [結髪 (veṇī, śikhā) ターバン (uṣṇīṣa) を] 解く

[弓 (dhanus) からその弦 (jyā) を (acc.)] はずす, 解く

3. [束縛 (bandha), 縛縄 (pāśa), 死 (mrtyu), 老 (jaras), 恐れ (bhaya), 地獄 (naraka) から (abl.), 人を (acc.)] 開放する, 自由にする

5. [自尊心 (māna), 身体 (deha), 生命 (prāṇa, jivita) を] 放つ = 見捨てる give up, lay aside

[財 (dhanāni), 食物 (anna), 享受 (bhoga) を] 放つ = 見捨てる

6. [場所 (deśa), 木蔭 (tāla), ベッド (śayyā) を] 離れる

[苦 (duḥkha), 恐れ (bhī) を] 離れる, のがれる

[小便 (mūtra) を] 出す, 放つ, 排出する

7. [矢 (śara, bāṇa), 矢の雨 (bāṇamaya varṣa), 飛び道具 (khaḍhūpa), 金剛杵 (vajra), 花 (puṣpa), 花束 (puṣpa-vṛnda) を (acc.)] 放つ, 投げる

8. [火 (agni), 匂い (gandha) を] 発する

[涙 (āsrūṇi, vāṣpa) を] 出す, 落とす let fall

9. [言葉 (vācas, śabda), 笑い (hāsa), プーという音 (phūtkāra), 大音声 (siṃha-nāda, 獅子吼), 歎息 (niḥśvāsa, 溜息) を (acc.)] 発する, 放つ, 出す

10. [受動形 mucyate, 過去分詞 mukta]

解放される, 解脱する, 放たれる, 脱する, 自由になる

以上によって, √muc は, 「放つ, 発する, 解放する, 解く, 離れる」等を意味することが, わかる。その中で 8 と 9 の「身体の中, または心の中にあるものを, 外へ出す, 放つ」というような用法があることに注意しておきたい。以上の意味と用法が pra √muc にも, 大体認められるようである。

pra- の意味は Apte によると

(1) 動詞の前に付されると, 前方に, 前に, 先に, 進んで, 上に, 先の方に forward, forth, in front, onward, before, away

(2) 形容詞の前では, 大いに, 甚だしく, 非常に very, excessively, very much

(3) 名詞の前では, 始め, 開始; 長さ; 力; 強度, 過剰; 起源, 源泉; 完成, 完全, 満足; 欠如, 分離, 長いこと; 離れた; 卓越; 清浄; 希望; 中止; 讚美, 尊敬; 優秀

というように示されている。いまは (1) の意味を念頭においておくといよいであろう。しかし, 前綴がついた動詞には, もとの語根とは微妙に異なった意味や用法があるはずである。以下, pra √muc の意味と用法とを, 精査してみよう。

いま手始めに『梵和大辞典』(11, 鈴木学術財団, 1967) の pra-MUC の項を見ると,

「解放する, (従) から解放する; ゆるめる, 解く, 離す; 駆逐する, 放棄する (吠); 見限る, 放任する; 放射する, 発する, 放つ; 投ずる, 投げ

打つ；贈与する，付与する；(涙 aśrūṇi を) 流す」(下略)
とある。詳しい用例はないので，これだけでは，この語の用法はよくわからないが，中村博士がいうほどこの語の意味や用法は単純ではないことが予想される。

そこで，ベートリンクとロートの辞典 PW における $\text{pra} \sqrt{\text{muc}}$ の用例を見よう (～は $\text{pra} \sqrt{\text{muc}}$ の変化形の省略を示す。書名の略号等は同書に従うが，表記法を改めたものもある)。

dhanvano jyām ~ VS.16.9 弓の弦^{つる}を解く (はずす)。

abhinahanam ~ *Ch.up.*6.14.2, *Çat.Br.*3.2.4.14 [目の] 掩い (目隠し) を解く (はずす)。

kṛtaṃ cid enaḥ pra mumugdhy asmat *RV.*1.24.9 作られた罪を我々から〔汝〕は取り去れ。

pāsāt ~ *RV.*6.74.4, 10.85.24, 161.1 縛縄から解放する。

sarvābhyo devatābhyo yajamānaṃ pramuñcati *Ait.Br.*2.9 あらゆる神々から祭主を解放する。

bhīmam samarāt pramoktum *MBh.*8.3532 ビーマを戦いから解放するため。

abandhyaṃ yaś ca badhnāti bandhyaṃ yaś ca pramuñcati *Yājñ.*2.243

捕縛すべきでない者を捕縛する者と捕縛すべき者を解放する者と。

aśvaṃ rāye pramuñcatā sudāsaḥ *RV.*3.53.11 スダースの馬を〔汝らは〕自由にせよ。富〔を得ん〕がために。

sītā tvayā pramuktā *R.*3.65.10 シータ〔妃〕は汝によって見捨てられた。

nicārtha-samācāraṃ sajjam karma pramuñcatu *R.*2.104.6 卑しい目的を行う用意をする行為を〔彼は〕控えよ (離れよ)

pramukta-śubhrāstarāṇambarasrak *R.Gorr.*2.76.32, *MBh.*6.1846 すばらしい臥床・衣・花環を見捨てた。

sarvaṃ pāpaṃ pramokṣyasi *MBh.*3.10819 [汝は] あらゆる悪を振り払う (脱) するであろう。

retaḥ ~ *AV.*2.34.2 精液を射出する。

dhūmaṃ pramumuce vindhyaḥ *MBh.*1.7627 ヴィンドヤ〔山〕が煙^はを噴いた。

hāhākaraṃ pramuñcantaḥ *MBh.*3.2542 [彼らは] 泣き声を出す。

viṇāḥ pramumucuḥ svarān *R.*2.91.26 諸の琵琶が音を出した。

bhīṣmeṇa mahāstrāṇi pramuñcatā *MBh.*5.7331, 8.1975, 4069 (pramuñ-

camānaḥ) ビーシュマ〔将軍〕が諸の大きな矢を放って
nārāca-mālām-raudra-cāpa-pramuktām *R.*6.79.62 恐ろしい弓から放たれた矢の列を。

asmad-bāhu-pramuktaiḥ - śūla-paṭṭīṣa-mudgaraiḥ *R.*3.26.15 我々の腕から放たれた三叉の槍・両刃の槍・棍棒によって，
kṣutaṃ pramuktam *Varāh.Br.*5.68.63 くしゃみが出た。

vavrim ~ *RV.*1.116.10 隠れ家を追い払う。

jarām ~ *RV.*140.8 老を追い払う。

pramuñcan mānuṣīr bhīyaḥ *VS.*27.7 人々の恐れを追い払う。

pramuñcamānau duritāni viśvā *TBr.*31.1.4 あらゆる悪運 (災難) を追い払いつつ。

ayaṃ vaḥ-drṣṭiḥ pramokṣyati *MBh.*1.68.25 この者は汝らに視力を与える (授ける) であろう (失われた視力を回復させるであろう)。

atra te 'haṃ pramokṣyāmi mālām kubje hiraṇyamayim *R.*2.9.39 ここで私は汝に黄金より成る環 (首飾り) を与えましょう。せむしの女よ。

〔受動活用の例〕(pramucyate)

pāśa ekaḥ pramucyate *MBh.*2.23.25 一つの縛縄がほどける。

pra vanaspatināṃ phalāni mucyante *Çat. Br.*1.5.4.5 樹々の実が落ちる。
yathāmraṃ vōdumbaraṃ vā pippalaṃ vā bandhanāt pramucyeta *Çat. Br.*14.771741, *Brh.*4.3.36 たとえば，マンゴー，無花果，或るいはビッパ
ラ〔果〕が，枝茎より離れるように。

yadā sarve pramucyante kāmā ye 'sya hr̥di śritāḥ *Çat. Br.*7.2.9=*Kaṭh.*6.14 この者の心臓に依っているすべての欲望が離れるとき。

karma-bandhāt ~ *Bhāg.P.*7.10.13 業の束縛から自由になる (離れる，離脱する)。

pāpāt ~ *Spr.* 3967, *MBh.*1.254 悪 (罪) から離れる。

adharmyād ayaśasyāc ca karmaṇaḥ ~ *MBh.*5.4.135 不法 (正) な，また不名誉な行為から離れる。

go-hatatyāyāḥ ~ *Hariv.*14382 牛殺し〔の罪〕から逃れる。

upasargāt ~ *Mārṣ.P.*406 病 (災い) から離れる (免れる)。

rogāt ~ *Pañcar.*1.8.35 病気から離れる。

candra iva rāhor mukhāt pramucya *Ch.up.*8.13 たとえば月がラーフ (月蝕) の口より逃れるように。

mṛtyu-mukhāt pramuktam *Kaṭh.*1.11 死神の口より免れた (逃れた)

narakāt ~ *Mārk.P.15.14* 地獄より逃れる。
sarva-pāpaiḥ pramucyate *M.4.181*, 11.262, *MBh.3.5072* あらゆる悪(罪)から解放される(解脱する)。

yad rātrau kurute pāpam-mahābhāratam ākhyāya pūrvām samdhyāṃ pramucyate (sc.tasmāt) *MBh.1.657* 夜にどんな悪(罪)を作っても、最初の薄明(暁・曙)に『マハーバーラタ』を読めば〔それより〕解放される。
lagna-garbhā pramucyeta *Hariv.14383* 子を孕んだ女は〔胎児から〕解放されるであろう。

sadyo garbhāt pramucyeta すぐに胎児から解放されるであろう。

〔使役活用〕(pramocayati)

veṇiṃ ~ *Hārīta bei Mallin. zu Bhag.14.12* 辮髪を解かせる(解く。)

pāpāt ~ *MBh.13.3112* 悪(罪)から解放させる(免れさせる)。

〔意欲活用〕(pramumuṣṣati)

āsīd abhyadhikā cāpi śriḥ śriyaṃ pramumuṣṣataḥ nirvāṇa-kāle dipasya vartim iva didhakṣataḥ *MBh.4.715* 美しさを見放そうとしている彼の美しさは、ますます増大した。たとえば燈火が燃え尽きる時に、燈芯を燃え上らせようとするように。

以上を見てみると中村元教授がいうような、単に「捨て去る」とか「放棄する」という意味が、私の解するところでは、ないのである。少なくともそういうのは、第一義的な意味ではないようである。pra√muc の意味を上記の PW の示す用例からまとめて見ると、能動態の意味は

- ①〔弓の弦(jyā), 掩い(abhinahana, 目隠し), 縛繩(pāśa)を〕(acc.) 解く(はずす, ほどく) auflösen, aufknüpfen, aufbinden, ablösen
- ②〔罪(pāpa), 老(jarā), 恐れ(bhī), 悪運(durita)を〕脱する(振り払う, 追い払う, 取り去る)。frei lassen, laufen lassen, verscheuchen, von sich abschütteln
- ③〔精液(retaḥ), 煙(dhūma), 声, 音(svara)を〕出す(entlassen), 〔涙(aśrūṇi)を〕こぼす vergiessen
- ④〔矢(astra), 槍を〕放つ, 投げつける schleudern, abschiessen
- ⑤〔行為(karman)を〕離れる(控える) Etwas fahren lassen, aufgeben
- ⑥〔臥床(āstarāṇa), 花環(sraj), 女を〕見捨てる Jmd im Stich lassen, aufgeben
- ⑦〔首飾り(mālā), 視力(drṣṭi)を〕与える(授ける) verleihen,

schenken

- ⑧〔人を, 縛繩(pāśa), 戦い(samara), 神々(devatā)から(abl); 馬(aśva)を〕解放する(自由にする) Jmd befreien von, frei lassen, frei machen

に分類されるであろう。(なお PW 以上の用例を含むサンスクリット辞典は、いまのところ存在しない。また他の辞典の示す語意も大体以上に尽きている。) ⑥は「放棄する」といってもよい。⑥と⑦とでは日本語の意味では反対のようであるが、本当はそうでない。自分の方から手放し捨てる, ということ(⑥の意)は, 相手に対しては与える, 授ける(⑦の意), ということになるのである。〔たとえば tyāga (パーリ cāga) は, 放棄, 断念の意から, 贈与, 施与の意となり, 捨施, 恵施, 布施とも訳されることは, よく知られている(『梵和大辞典』参照)。今もそれと同じ考え方が認められるのである〕。

以上 pra√muc の八つの意味を, もっと簡単に要約してみると

(a)〔しばっているものを〕解く

(b)〔中(傍, 体内)にあるものを〕出す(放つ)

ということになろう。そして (b)の意味が重要である如くである。

(2) パーリ pamuñcati の用例

パーリの pamuñcati の用例と用法は, *Pāli Tipiṭakam Concordance* (Vol. III. Part III. London 1969, PTC) に出ている。いまその用例を見ると, 大体は先の PW の用例の延長線上において理解できるものである。

以下パーリの pamuñcati の用例を PTC によって見ておこう。

ただし, いまはその順序等を改めて, 意味にしたがって並べてその用例をみでみる。ただし, 信(saddhā)と一緒に用いられる例は後で検討することにして, いまは省く(書名略号は同書に従う。また処々, 前後の語句を加えたり, 誤記や誤植等を改めたところがある)。

(I) purimāni pamuñca bandhanāni *Thag.414* 先の束縛を解け。

pamuñca bhaṣṭam *J. III.347* 袋を解け。

sattu-bhaṣṭam pamuñci *J. III.348* 麦菓子マクシの袋を解いた。

tato taṃ pamuñciṃ pāsā *J. V.346* それから彼を毘(縛繩)から放った(解放した)。

pamuñca maṃ Sakka kathamkathāhi *Sn.1063* 釈迦よ。私を疑いより解放して下さい。

muñca pamuñca mocehi uddhara samuddhara vuṭṭhāpehi kathamkatha-

- sallato *Nd.* II.196 (§ 407) [私を] 疑いの箭より放して下さい、解放して下さい、除いて下さい、除き去って下さい、起ち上らせて下さい。
- imañ ca sūlato lahuṃ pamuñca *Pv.* 53 そしてこの者（餓鬼）を杭より速かに解放せよ（放せ）。
- etaṃ…lahuṃ pamuñca *Pv.* 54 この者を速やかに解放せよ（放せ）。
- vassikā viya pupphāni maddavāni pamuñcati *Dh.* 377 ジャスミンが萎れた花を落とすように。
- tadā kaṇho pamokkhati *J.* IV.183 そのとき黒〔犬〕（帝釈天が連れてくる恐ろしい犬）が放されるであろう。
- sappaṃ pamokkhāmi na tāva kākaṃ *J.* III.298 [私は] 蛇を放す（逃がす）だろうが、まず烏をば〔放す〕まい。
- so ahaṃ pamokkhāmi migam *J.* IV.418 その私は鹿を放すであろう。
- pamuñcatu Dhamma-pālam *J.* III.179 ff. [彼は] ダンマ パーラ [王子 (kumāra)] を放せ（解放せよ）。
- pamuñcath' etaṃ *J.* IV.253 [汝らは] これ (kinnari) を放せ（解放せよ）。
- Rāhu candaṃ pamuñcassu *S.* I.50 ラーフ（月蝕や日蝕をおこす怪物）よ。月を放せ（解放せよ）。
- Rāhu candaṃ pamuñcasi *S.* I.50 ラーフは月を放した。
- Rāhu suriyaṃ pamuñca *S.* I.50 ラーフよ。太陽を放せ（解放せよ）。
- Rāhu suriyaṃ pamuñcasi *S.* I.50 ラーフは太陽を放した。
- sakuṇagghi…lāpaṃ sakuṇaṃ pamuñci *S.* V.147 鷹は鶉鳥を放した。
- brāhmaṇassa pamuñciya *J.* IV.548 [子等は] バラモンから逃れて
- (II) bandhanā ca pamuñceyya *J.* II.247 [彼は] 束縛から逃れるであろう。
- dukkhā pamuñci *J.* IV.342 [彼は] 苦から脱した（逃れた）。
- dukkhā pamuñce caraṇaṃ apatvā *J.* III.236 f. IV.300
- よい行いを得ないと、苦から脱することはないであろう。
- patipannā pamokkhanti jhāyino mārabandhanā *Dh.* 276
- 修行し瞑想する者たちは魔の束縛から脱れるであろう。
- na taṃ jivaṃ pamokkhasi *J.* IV.6 [おまえは] 生きてるとそれ（刃のついた輪 Khura-cakka）を脱れないであろう。
- pāsā pamokkhasi *J.* IV.280. V.361, 370 [汝は] 束縛から自由になる（解放される）。
- pañjarato pamokkhāmi dhataratṭhaṃ *J.* V.376. [私は] ダタラッタ（鷺鳥）を籠から放とう（逃がしてやろう）。

- (III) ayam aggim pamuñcati *J.* I.216, *J.* III.510 これ（木rukka）が火を放つ（噴く）。
- (IV) vācam pamuñce kusalaṃ nāivelam *Sn.* 873, *J.* II.177. *Nd.* I.503 善い言葉を發せよ（語れ）。度が過ぎた〔言葉〕を〔発する（語る）〕な。
- saṃham giram atthavatim pamuñce *J.* IV.226 意味のある、優しい言葉を語れ（発せ）。
- rattim giram nāivelam pamuñce *J.* V.81 夜には適時（度）を過ぎて言葉を語ってはならぬ。
- attha-saṃhitam vācam muñceyya pamuñceyya sampamuñceyya *Nd.* I.504 意義がそなわった言葉を語れ、發せ、述べよ。
- (V) [受動活用]
- sabba-dukkhā pamuccati *S.* I.14, 18, 38, 57, 173, *Dh.* 189, 192, 361, *Ud.* 9, *It.* 52, *Sn.* 80, *Kvu.* 254 あらゆる苦しみ（一切苦）から解脱す（脱れる）。
- Kathaṃ dukkhā pamuccati *S.* I.16, *Sn.* 170 どのようにして苦から脱れるのか。
- n'eva dukkhā pamuccati *S.* IV.205 [彼は] 苦から決して脱れない。
- evaṃ dukkhā pamuccati *Sn.* 171f. *Kvu.* 369 このようにして苦から脱れる。
- pāpa-kammā pamuccati *Thig.* 237, 240, *Ap.* 612 悪業から脱れる。
- duddiṭṭhi na dukkhā pamuccare *Ud.* 73 悪見の人たちは苦から脱れない。
- sabba-dukkhā pamuccare *Ap.* 20 [彼らは] あらゆる苦しみから脱れる。
- verā so na pamuccati *Dh.* 291 彼は怨みから脱れない。
- etaṃ bi bandhanaṃ dukkhaṃ yamhā dhiro pamuccati *A.* III.354
- なぜなら、この縛り目は苦しい。その〔縛り目〕から賢者は脱れる。
- (VI) [使役活用]
- yogā pamocenti bahujaṇaṃ te *It.* 80 彼らは多くの人々を輓より解放してくれる。
- mañ ca sokā pamocaya *J.* I.332 そして私を悲しみ（憂い）より解放して下さい。
- macche sokā pamocaya *Cp.* 99 (3.10.7d) 魚たちを憂いより解放しなさい。
- amhe dukkhā pamocaya *J.* IV.440 私たちを苦しみより解放して下さい。
- na…piyo dukkhā pamocaye *S.* I.210 愛する〔夫〕も苦より解放してくれないであろう。
- tam dukkhā pamocaye *J.* III.211 彼を苦より解放してくれるであろう。

so no dukkhā pamocaye J.V.305 彼は私たちを苦から解放してくれるであろう。

kena nu kho upāyena nāti dukkhā pamocaye Cp.99 (3.10.3cd) いったいかなる手段をもって〔私は〕親族たちをば苦より解放して（救って）あげる〔ことができる〕であろうか。

dukkhūpanitaṃ maccu-mukhā pamocayi J.IV.271 苦に陥った者を死神の口より解放した（救った）。

yo maṃ dukkhā pamocesi Thig.157 私を苦より解放してくれた者。

alaṃ dukkhā pamocetum J.IV.227 苦より解放してあげることができる。pamocayittha balasā pasayha S. I.143 〔龍に捕われた舟を〕力づくで強いて解放させた。

yogena taṃ pamocayim Cp.89 (2.7.5d) 〔私は〕それ（頭が割れること）を方便によって取り除けた（救った）。

pamocesim nātinam taṃ atikkhayaṃ Cp.99 (3.10.4cd) 〔私は〕親族たちのその破滅を救うであろう（救った）。

gatte sedaṃ pamocayaṃ Ap.68 肢体に汗を出させた。

以上の用例の中で、まず「捨てる」「捨て去る」という意味の用例は見あたらないこと、第二に、「言葉 (vācā, girā) を発する (pamuñcati, 放つ、語る)」という新しい用例があることに特に注意したい（そのような用例は \sqrt{muc} にもあることは先にもふれた）。「言葉を捨て去る」のではないのである。それにならって、同様に「信 (saddhā) を発する (pamuñcati, おこす)」と解することは、理解しやすいであろう。先に見たように動詞 $\text{pra}\sqrt{muc}$ が、「中にあるものを出す」のが原意の一つであった。してみると心の中にある信（信仰心、信頼心）を、外に向かって出す（しかし、捨て去る、というのではない）というのが、pamuñcati の意味であると解することは、不自然ではないはずである。

そして実際に、この動詞は言葉 (vācā) を目的語とすると同じように、信 (saddhā, 信頼心) を目的とするのである。次の二例を比較していただきたい。

(a) attha-saṃhitam vācam muñceyya pamuñceyya sampamuñceyya Nd. I.

504 意義がそなわった言葉を語れ、^{はな}発せ、述べよ。

(b) tvam saddham muñcassu pamuñcassu sampamuñcassu Nd. II (Syāma-ratṭhassa Tepitakam 30 Cūlaniddeso, p.309⁴⁻⁵, cf. Nd. II p.196 § 407)

汝は信を寄せよ、^お發こせ、^{はな}発せ。

ここでは、三つの動詞の訳語を適宜に邦語の用法にあわせて、原語ではこの三つの動詞は同じ語根 \sqrt{muc} に由来して、「放つ」「発す」「出す」が原意である。前綴（接頭辞）pa (Sanskrit では pra) は、大体「前の方に」「前に」「先に」「大いに」など、sam は「一緒に」「共に」「完全に」「よく」「すっかり」などを意味する。そうであるから、原語、原意を強調するならば

(a) 言葉を發せ、前に發せ、よく前に發せ

(b) 信を發せ、前に發せ、よく前に發せ

としてよいであろう（これら Nd. II 等の例については、後でもう一度ふれることにしよう）。以上で、ほぼ結論がでたようである。

しかし、この趣旨を確認し、補強するためにも、仏教と仏教以前における信 (śraddhā, パーリ saddhā) の意味と用例を調べておくことは、避けるわけにはいかない。

三 Śraddhā (パーリ saddhā) の意味と用例

(1) 問題の所在

śraddhā, saddhā (信) の原意について考察するとき、我々は知らず知らずの中に、日本語の信や信仰の意味を投影して考えていないか、という点を反省しなければならない。日本語では、正信もあれば、邪信、迷信、盲信のような用語もある。「信を捨てる」「信仰を捨て去る」ということは、日本語では全く問題のない表現である。しかしはたして、サンスクリットの śraddhā やパーリの saddhā に、捨てるべきものと考えられる信、つまり迷信とか邪信のような用例があるかどうか。こういうところに、最も注意する必要がある。それを知るためには、śraddhā (saddhā) の用例を集めて考察しなければならない。なお、śraddhā は、 $\text{śrat} + \sqrt{dhā}$ に分解され、 $\text{śrad}\sqrt{dhā}$ は動詞として「信頼する」「信ずる」の意で用いられる（パーリでは saddahati）。しかしいまはこの動詞の意味用法については、ふれないで置く。

(2) Śraddhā (主にヴェーダ文献における)

śraddhā の用例とその意味については、これまで相当の研究が行われてきた。その中で Hans-Werbin Köhler, *Śrad-dhā in der vedischen und altbuddhistischen Literatur*, Glaserapp-Stiftung Band 9, Wiesbaden 1973 (Dissertation, Göttingen 1948) は、主にヴェーダ文献における動詞 ($\text{śrad}\sqrt{dhā}$ (信頼する、信ずる)) と名詞 śraddhā (信頼、信) の用法とその意味を考察している。また

Paul Hacker, *Śraddhā*, WZKSO.VII.1963, pp.151-189もヴェーダ以来の śraddhāの意味用法を整理している。またこのほか、śraddhāについて、参照すべき論及は少くない。⁽²⁾

ケーラーによると『リグ・ヴェーダ』(*Rg-Veda, RV*)においては、śraddhāは、「神学的な信」(theologisches Credo)ではなくて、「信頼(Vertrauen)ーそれには神々やその力、しかも大抵はIndraに関する信頼ーである(p.64)という。そしてこれにはハッカーも賛成して、ヴェーダにおいてはśraddhāは「信頼」と訳されるのは、争われないのであって、「信」(Glauben)の意味はRVにおいては確かめられない、というのは正しい、と述べている(Hacker p.160)。そしてその意味の発展は、信頼(Vertrauen)、忠実さ(Treue, 誠実さ)、帰依(Hingabe)、供犠愛好(Opferfreudigkeit)、布施愛好(Spendefreudigkeit)となる(Köhler p.64, Hacker p.160)と。ブラーフマナにおいては、śraddhāは供犠の力に対する信頼となる(Köhler p.65)と。

そしてハッカーは、śraddhāを知性的な(intellektuell, intellectual) śraddhāーそれは師の教示に対する信頼、依存心であるーと祭祀的な(rituell, ritual) śraddhāーそれは人の欲望を神へと運び、司祭者へと運ぶ乗物(媒介者)であるーとに分けている(pp.158, 188)。

またハッカーは、śraddhāの第二の意味として、願望(Verlangen)、熱望(Begehren)、希望(Wünschen)の意味が、後代の文献に多く見られると述べている(p.116)。

ケーラー等が指摘したśraddhāの「信頼」という意味については、辻直四郎博士も同意見である如くである。同博士の『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫、昭和45年)には、「シュラッダー(信仰)の歌」(*RV.10.151*)の和訳が含まれている(p.345)。ここではśraddhā(信頼)は神格(女神)とも見なされている。同博士は

「ここに神格化されたシュラッダーは、本来人間の神々に対する信念、祭主と祭官とのあいだの信頼感、特にダクシナー(布施)の受授において具現する相互の信用を意味する。ヴェーダ祭式は実にこの信仰を基礎として成立している」(波線は筆者による)

と解説している。信仰の語を用いながらも、それが「信頼感」「信用」であることを示している。Śraddhā(信頼)の歌は次のようである(ここではŚraddhāをŚと略記する)。

『(1)Ś(信頼)によって祭火(agni)は点ぜられる。Ś(信頼)をもって供物(havis)は捧げられる。〔私らは〕幸運(bhaga)の頂上において、言葉

(vacas)をもってŚ(信頼)を告げ知らせる(vedayāmasi)。

(2) Ś(信頼)よ。私の言うことを施与する者に大切なこと(priya, 愛すべきこと)〔となして下さい〕。Ś(信頼)よ。施与しようとしている者に大切なこと〔となして下さい〕。寛裕な祭主(yajvan)たちにおいて大切なこととなして下さい。

(3) たとえば神々が(devāḥ)強力なアスラ(asura)たちにおいてŚ(信頼)を起こさせたように、そのように寛裕なる祭主において、私らの言うことに〔信頼を起こさせよ〕。

(4) 祭祀を行ない(yajamāna)・風神vāyuを守護者とする神々は、Ś(信頼)に奉仕する(upāsate)。心からの願い(ākūti, 意図)によってŚ(信頼)に〔奉仕する〕。Ś(信頼)によって〔人は〕財物(vasu)を獲る。

(5)早朝にŚ(信頼)を〔私らは〕呼ぶ。Ś(信頼)を正午に〔呼ぶ〕。Ś(信頼)を日没に〔呼ぶ〕。Ś(信頼)よ。ここに私らを信頼せしめよ(śraddhā-paya)。(RV.10.151.1~5)

ここにśraddhāの意を「信頼」と考える(「信仰」ではないであろう)。神または祭主に対する信頼によって、祭祀が行われる。言葉をもって信頼〔していること〕を〔祭主等に〕告げ知らせる。その言葉が施与する人や祭主によって、大切に思われること、信頼されることを、Śraddhā(信頼)の女神に祈願する。自分が人々に信頼(信用)されることを祈るのである。⁽³⁾

この外、いまは詳しい検討は省略するが、ケーラー等が示したśraddhāの意味の「信頼」「忠実さ」等は、「捨てる」という意味の動詞の目的語とならないであろう、ということだけは予想することができよう。実際にśraddhāを「捨てる」と解すべき用例は見出されていないようである。

śraddhāを目的語とする動詞には、どのようなものがあるか。以下śraddhāと動詞との関係を見てみよう。

〔acc.の例〕

śraddhām devāḥ...upāsate RV.10.151.4ab 神々は「信頼」〔の女神〕に奉仕する(「信頼」を崇拜観想する)。

ye cāmī aranye śraddhām satyam upāsate Brh 6.2.15 また誰でも森(荒地)において信(信仰)が真実であると崇拜観想するこれらの人たち(=死後に神路を進む人たち)。

etasminn agnau devāḥ śraddhām juhvati Ch.5.4.2=Brh.6.2.9

この火(=あの世)に神々は信(信頼)を捧げる(五火教)。

yadā vai śraddadhāti atha manute, nāśraddadhan manute, śraddadhad

eva manute, śraddhā tv eva vijijñāsītavyēti śraddhām bhagavaḥ vijijñāsai ti *Ch.*7.19.1 「誠に信ずる（信賴する）ときに、そこで思う。信じないと思わない。信ずることのみ思う。しかし信（信賴）をこそ認識しようと願うべし」と。「尊師よ。〔私は〕信（信賴）を認識しようと願う」と。

kasmin nu śraddhā pratiṣṭhitā iti. hṛdaye iti ha-uvāca, hṛdayena hi śraddhām jānāti, hṛdaye hy eva śraddhā pratiṣṭhitā bhavatiti *Brh.* 3.9.21 「一体信賴は何に安立（依存）しているのか」と。「心に〔安立〕（依存）している」と〔彼は〕言った。「なぜなら心によって信賴を知るからだ。なぜなら心において、信賴は安立（依存）しているからだ」と。

sa prāṇam aśṛjata, prāṇac chraddhām khaṃ vāyur jyotir āpah pṛthivi-ndriyam, mano'nnam, annād vīryam, tapo mantrāḥ karma lokāḥ, lokeṣu ca nāma ca *Praśna* 6.4 彼（puruṣa）は息（生氣）を流出（創出）した。息から信賴〔を流出した〕。虚空，風，光，水，地，感官，意，食が〔生じた〕。食から精力，苦行，諸真言，業（行為），諸世界，そして諸世界における名が〔生じた〕。

yo yo yām yām tanuṃ bhaktaḥ śraddhayā 'rcitum icchati tasya tasya-acalām śraddhām tām eva vidadhāmy aham *Bhag.*7.21 それぞれいかなる信者（bhakta）が、それぞれいかなる〔神〕体を信（信仰）をもって崇拜しようと欲しても、〔われ（＝神）は〕それぞれ〔信者〕の同じその信（信仰）を不動なものと定める。（以上 G.A.Jacob, *A Concordance to the Principal Upanishads and Bhagavadgītā*, 1891, Delhi 1963 参照）

śraddhām śrutiṣu saṃdadhe *LA* (III) 91.3⁽⁴⁾ 諸天啓聖典に対して信（信賴）を置く。

ciccheda jivite śraddhām dharme yaśasi cātmanāḥ *R.*2.28.2

自分の生命，正義，名誉に対する願望（信賴）を断ち切った。

cicheda jivita-śraddhām sukha-śraddhām ca duḥkhiṭaḥ *R.*2.37.15 苦しめられて（苦しんで）生命への願望（信賴）と楽への願望（信賴）を断ち切った。

tapāḥ-śraddhā ye hy upavasanty arāṇye śāntā vidvāṃso bhaikṣācārāṃ carantaḥ, sūrya-dvāreṇa te virajāḥ prayānti yatra-amṛtaḥ sa puruṣo hy avyayātmā *Muṇḍ* 1.2.11

誰でも苦行と信（信仰）とを森（荒地）において実践し，平安にして知あり，乞食行を行なう人たちは，汚れなく，太陽の門によって出て行く。そこにおいて，かの不死なる靈我＝不滅の我があるところへ〔出て行く〕（＝死後に神路を進んで行く人たち）。

[instr. の例]

vratena dikṣām āpnoti dikṣayā āpnoti dakṣiṇām |

dakṣiṇā śraddhām āpnoti śraddhayā satyam āpyate || (*Vāj.Saṃ* 19.30) 掟（誓戒）によって潔斎を得，潔斎によって報酬（謝礼）を得，報酬によって信賴を得，信賴によって真実（誠）が得られる。

śraddhayā deyam āsaddhayā' deyam śriyā deyam, hiriyā deyam, bhiyā deyam saṃvidā deyam *Tait* 1.11.3 信賴（信）をもって施与すべし。不信をもって施与すべからず，富をもって施与すべし。慎み（慚）をもって施与すべし。畏れをもって施与すべし。同情をもって施与すべし。

yadā lelāyate hy arcis samiddhe havya-vāhane, tadā ājya-bhāgāv antareṇa-āhutiḥ pratipādayec chraddhayā-āhutam⁽⁵⁾ *Muṇḍ* 1.2.3.

火（供物を運ぶもの）が点されて焰が揺ぐときに，バターの両部分の間に信（信賴）をもって献供の供物を投ずべし。

bhūya eva tapasā brahmacaryeṇa śraddhayā saṃvatsaram saṃvatsyatha, yathā-kāmam praśnān pṛcchatha, yadi vijñāsyāmaḥ sarvaṃ ha vo vak-ṣyāma iti *Praśna* 1.2 もう更に一年〔汝らは〕苦行をもって，梵行（童貞行）をもって，信（信賴）をもって，共に住するであろう。欲するがままに質問をせよ。もし〔我々が〕認識するならば，まことに全てを汝らに説くであろう。

atha-uttareṇa tapasā brahmacaryeṇa śraddhayā vidyayā-ātmānam anuviṣya-ādityam abhijayante, etad vai prāṇānām āyatanam, etad amṛtam abhayaṃ, etad parāyaṇam, etasmān na punar āvartante, ity eṣa nirodhaḥ *Praśna* 1.10

さて〔彼らが，太陽が北方に寄る〕北道によって，苦行によって，梵行によって信（信仰）によって，明知によって我を求めると，太陽に到る。これこそ，諸生氣の領域であり，これは不死・無畏であり，これは帰趨であり，これより再び帰来しない。故にこれは〔生の〕停止である（＝死後に神路を進む人たちは太陽に到って，この世に帰来しない）。

tapasā brahmacaryeṇa śraddhayā sampanno mahimānam anubhavati *Praśna*.5.3〔彼は〕苦行と梵行と信（信賴）とを具えて，偉大性を経験する。śraddhā vardhate dharmāḥ *R.*3.43.38 信賴によって正義（法）は増大する。

śraddhayā prājño vākyam etad uvāca ha *R.*7.50.9 知慧ある者は信賴によって，この言葉を述べた。

sa tayā śraddhayā yuktas tasya-ārāadhanam ihate *Bhag.* 7.22
 彼はその信（信仰）を具え、その〔神格に〕奉仕することを願う。
 ye'py anya-devatā-bhaktā yajante śraddhayā-anvitāḥ *Bhag.* 9.23 他の
 神格を信奉し、信（信仰）を具えて祭る者たち。
 mayy āveśya mano ye mām nitya-yuktā upāsate, śraddhayā parayā-
 upetas te me yuktatamā matāḥ *Bhag.* 12.2
 意をわれ（＝神）に潜め、最高の信（信仰）を具え、常に心統一して、われ
 を崇拜する者たち、彼らは、われによって最上の心統一者と考えられる。
 śraddhayā parayā taptam tapas tat trividham naraiḥ aphalākāṅkṣibhir
 yuktaiḥ sāttvikam paricakṣate *Bhag.* 17.17.
 その〔身・口・意の〕三種の苦行が、果報を予期しない心統一した人た
 ちによって、最高の信（信仰）によって行なわれると、〔人々はそれを〕純質
 的〔苦行〕と呼ぶ。

〔dat. の例〕

ā tv eva śraddhāyai hotavyam *Ait.Br.* 5.27.7.10
 しかし、信賴のために供物を捧げるべし。
 śraddhāyai vai devā dīkṣam niramimita *Çat.Br.* 12.1.2.1 ; 3.23
 信賴のためにこそ神々は潔斎を行なった（PWによる）。

〔loc. の例〕

kasmin nu dakṣiṇā pratiṣṭhitā iti. śraddhāyām iti. yadā hy eva śradd-
 hatte atha dakṣiṇam dadāti ; śraddhāyām hy eva dakṣiṇā pratiṣṭhitā -
 iti *Brh.* 3.9.21 「一体〔祭官への〕報酬（布施）は何に安立（依存）して
 いるのか」と。「信賴に〔安立（依存）している〕」と。「なぜなら、人が信賴
 するときに報酬（布施）を与えるからだ。なぜなら信賴に報酬（布施）は安
 立（依存）しているからだ」と。

以上 śraddhā の多くの例は、信賴の意味を中心している（ただし *Bhag.* の
 例は、神に対する信、信仰の意）。そして「捨てる」というような意味の動詞
 とは結びつかない如くである。

(3) Śraddhā（パーリ saddhā）の意味

śraddhā が信賴の意味を主とすることを見てきたが、次に註釈文献において、
 śraddhā（信、信賴）はどのように説明されているかを見てみよう。

上引のウパニシャド等の śraddhā（信、信賴）の例について、ジャンカラ

（Śaṅkara, 8世紀）は次のように説明している⁽⁶⁾。

- (1) mantavya-viṣaye ādaraḥ āstikya-buddhiḥ śraddhā (ad *Ch.* 7.19.1)
 信（信賴）とは、考えるべき対象に対する尊敬（顧慮）、存在するという意識（有るという思い）である。
- (2) śraddhā adṛṣṭārtheṣu karmasv āstikya-buddhir devatādiṣu ca (ad *Brh.* 1.5.3)
 信（信賴）とは、目に見えない対象である業や神格等に対する、存在するという意識（有るという思い）である。
- (3) śraddhā nāma ditsutvam āstikya-buddhir bhakti-sahitā (ad *Brh.* 3.9.21)
 信（信賴）とは、施与しようとする者であることであり、愛信を伴う存在するという意識（有るという思い）である。
- (4) śraddhā yat-pūrvakam sarva-puruṣārtha-sādhana-prayogaḥ citta-prasāda āstikya-buddhiḥ (ad *Muṇḍ.* 2.1.7)
 信（信賴）とは、それにもとづいて全ゆる人の目的の成就達成が用いられるものであり、心の清澄（澄浄）であり、存在するという意識（有るという思い）である。
- (5) śraddhā nāma apavarga-prāptau tat-sādhana-śravaṇe ca kataka-phala-samparka iva salilasya cetasaḥ samprasādaḥ samprasattiḥ. sā hi janāni-iva kalyāṇi yoginaṃ pāti rakṣaty aśubhebhyaḥ (*Yoga-Sūtra-Bhāṣya-Vivaraṇa* 1.20)
 信（信仰）というのは、解脱の達成に対してまたはその手段を聞くことに対して、たとえば水がカタカ〔樹の〕果実に触れる〔と清らかになる〕ように、心が清澄になること＝澄浄になることである。なぜならそれ（信）は、善き母のように行者を諸の不浄（罪・禍い）から守り保護をするからである⁽⁷⁾。

以上の中で(1)～(4)の āstikya-buddhi（存在するという意識）という語は、それだけで śraddhā（信、信賴）を説明する同意語のように用いられる（Śaṅkara ad *Bhag.* 6.37, 9.23, 17.1, 17.17）。āstikya（存在するという者であること、実有論）は、āstika（存在するという者）の抽象名詞であり、āstika（存在するという者）は asti（存在する、有る）に由来する名詞である。存在する（有る）と言う（主張する）考えであり、いわば實在（実有）論者ということになる。āstikya はいわば實在（実有）論、實在（実有）主義といってもよいであろう。これに対立する（矛盾する）のが虚無論、虚無主義であり、nāstikya（存在しないという者であること）という。虚無論者、虚無主義者を nāstika（存在しないという者）という。これは異端者である。

後世（15, 6世紀）のマドゥスーダナ・サラスヴァティー（Madhusūdana-

sarasvatī) は『種々なる道』(*Prasthāna-bheda*) の巻初において、Nāstika (異端者、異端派) に

仏教 (Saugata, 中觀派, 瑜伽行派, 經量部, 毘婆沙派の四)

順世派 (Cārvāka, 唯物論者)

ジャイナ教徒 (Digambara, 空衣派)

を数えて、ヴェーダ学の分科である Āstika (実有論者、正統派) と区別している⁽⁸⁾。以上の異端派の中で共通する主張は神の存在を認めないことである。これに対して正当派たる Āstika は神の存在を認める、というところにも特色があるということになろう。śraddhā (信、信賴) の同意語としての āstikya-buddhi (存在するという意識) は、有神論的な『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavad-gītā*, *Bhag*と略)の śraddhā (信、信仰) の解釈の場合には、「神が存在 (実在) するという意識」である、というのは、理解しやすい。信というのは、結局、存在 (有ること) を認め肯定する意識だというのである。しかし、このような解釈は、仏教の中には、見あたらないようである。

上の(4)と特に(5)の解釈は、śraddhā (信) を、心の清澄 (citta-prasāda, 心澄淨), 心が清澄 (澄淨) になること (cetasah samprasādaḥ) とするもので、ヨーガ学派の伝統である。ヴァーサ (Vyāsa) の註釈 (*Yoga-sūtra-Bhāṣya* 1.20) は

śraddhā cetasah samprasādaḥ (信とは心の清澄である)

と述べている。それに対してシャンカラは上述のような解釈を加えたのである。このように、信とは、心が清らかになり澄むことである、という解釈は、実は仏教の伝統の中にもあったのである。ヴァーサと同じころ、ヴァスバンドゥ (Vasubandhu, 世親) は『俱舍論 (*Abhidharma-kośa-Bhāṣya* II.25) において、śraddhā cetasah prasādaḥ | satya-ratna-karma-phala-abhisampratyaya ity apare | (P.Pradhan ed., p.55⁶⁻⁷)

『信とは心の清澄 (澄淨) である。〔または〕〔四〕諦・〔三〕宝・業果に対する確信である、と他の人たちは〔言う〕。』

〔玄奘訳〕信者令心澄淨化。有説。於諦宝⁽⁹⁾業果中現前忍許故名爲信 (『大正』29.19b²⁻⁴)

〔真諦訳〕信謂心澄淨。有餘師説。於諦宝⁽¹⁰⁾業果中心決了故名爲信 (同p. 178b²³⁻²⁴)

と解している。

また世親と同じころの塞建陀羅に帰られる『入阿毘達磨論』(玄奘訳, 『大正』28, 982ab) にも

『信は謂はく心をして境に於いて澄淨ならしむ。謂はく三宝・因果・相属・有性等の中に於いて現前に忍許するが故に信となす。是れ能く心の濁穢の法を除遣す。清水珠を池内に置かば、濁穢の水をして皆即ち澄清ならしむるが如く、是れの如く信の珠、心池の内に在らば、心の諸の濁穢は皆即ち除遣す⁽¹¹⁾』という。清水珠は浄水珠⁽¹²⁾ともいい、「水を清澄にする (清らかにする) 珠」の意であり、サンスクリット語では udaka-prasāda-maṇi (*Gaṇḍavyūha* p. 53²⁻³), または udaka-prāsada-maṇi (idid, p.495¹) といい、パーリ語では、udaka-ppasāda-maṇi (*SnA*. p.144⁷, *Vism* p.464²⁰), または udaka-ppasādanaka-maṇi (*As*.p.120¹⁷) という。信は心を清らかにし澄ませることは、清水珠が水を清らかにすることに喩えられるのである。

同じころスリランカでパーリ註釈書を書いたブッダゴーサ (Buddhaghosa) も次のように言う。

『⁽¹³⁾信 (saddhā) とは、清澄 (浄信) を特相とし (sampasāda-lakkhaṇā), 或いは信賴を特相とし (okappana-lakkhaṇā), 跳躍を味とし (pakkhandana-rasā), 信解として現われ (adhimutti-paccupaṭṭhānā), 或いは〔心の〕汚濁がないこととして現われ (akālussiya-paccupaṭṭhānā), 預流支を足場とし (sotāpatti-y-aṅga-pada-ṭṭhānā), 或いは信すべき法を足場とし (saddahitabba-dhamma-pada-ṭṭhānā), 鏡や水面などが清澄 (pasāda) であるように、心が清澄 (澄淨) になったのであり (cetaso pasāda-bhūtā), 水を清澄 (澄淨) にする珠 (udaka-ppasādaka-maṇi, 清水珠) のように、水に相当する諸法を清澄にするもの (pasādikā) である。』(*SnA*. p.144³⁻⁸, cf. *Vism*.p.464¹⁸⁻²⁴, *As*.p.120¹⁶⁻²¹)⁽¹⁴⁾

これも先の例と同じ意味である。ここで水に喩えられるのは、単に諸法というのが、心の中にある諸の作用 (心所法) を予想しているのであろう。

シャンカラは、水を清らかにするカタカ果を例にあげるが、意味上は同類の比喩である。信は、水が清く澄むように、心が清く澄むこと、或いは心を清く澄ませる作用である。このような意味の信を捨てることが、推奨され奨励されるとは、考えられないのではないか⁽¹⁵⁾。

四 pamuñcantu saddham の意味⁽¹⁶⁾

(1) 従前の諸解釈

この一句についての従前の解釈は、(a)「信を發こせ」か(b)「信を捨てよ」かの二種に分かれる。(a)説が最初に現れたが、後に (b)説が優勢になった観がある。まずわが国における訳例を見てみよう。

(a)説（信を發こせ）

姉崎正治『現身仏と法身仏』（明治37（1904 A.D）年，改訂版，昭和31（1956）年，p.27）は，上掲の詩節を次のように訳して，原文とサンスクリット文や漢訳の併行例とを対比して示している。

「かれ等の為に不死の門は開かれたり，聞かん人は之を信じて解脱せよ。

（先には）害を恐れて心中を説かざりき，人々の間に至重の法を（説かざりき）。」

「之を信じて解脱せよ」とは，正確ではないが，「信を發こせ」と解することに近い。

立花俊道『国訳大品』（『国訳大蔵經』論部第14卷，大正9（1920）年，pp.9-10）はこう訳している。

「耳あるもの，彼等のため不滅の門は開かれぬ，信心を發し〔て之を受けよ〕かし。

梵王よ，〔我は〕害を意識せし〔が故に〕，人間の中にて美妙優長の法を説かざりき。」

これは正確な訳文である。しかし，この解釈は，(b)説の優勢の下に，長い間忘れられることになる。

(b)説優位の下で(a)説を改めて主張した藤田宏達「原始仏教における信の形態」（『北海道大学文学部紀要』第6号，昭和32（1957）年，pp.65-111の中特にp.68）は，次のように訳して，従来の解釈や漢訳等の併行例を挙げて考察している。

「彼らに甘露（不死）の諸門は聞かれたり，耳あるものならば信を發せよ。

〔我は〕害想あるを熟知して，人々に対して微妙なる法を説かざりき。」

これは大体，立花訳を継承している。そして藤田教授は，同様の解釈を最近の「原始仏教における信」（『仏教思想11 信』平楽寺書店，1992年pp.91-142，特にp.93）においても示して，問題の句を「信を發せよ」と訳している。

榎本文雄「東トルキスタン出土梵文阿含の系譜」（『華頂短大研究紀要』第29号，昭和59（1984）年，p.18）は，この詩節の併行例を対比して研究しているが，問題の一句を「信頼心を（私に）向けなさい」と解している。

その後，袴谷憲昭『本覚思想批判』（大蔵出版1989年）p.297も藤田説に賛同して，「信仰を向けよ」と理解する，といっている。

講談社『原始仏典－ブッダの生涯』（昭和60（1985）年，p.62）の中で石上善応教授は，この詩節をこう訳している。

「耳ある者たちに不死へのもろもろの門は開かれた。

浄信を發こせ。

梵天よ，人々を害するであろうかと案じて，

わたしは熟知した，すぐれた教人を人々に向かって説かなかったのだ。」

そして第二句について「〔おのが〕信仰を捨てよ」とも読める」と註記している（p.333）。以上の諸の訳例を見ると，第三句の解釈にも問題があることがわかる。それについては後でもう一度ふれるであろう。

その後筆者も「信を發こせ（寄せよ）」という解釈を公表して識者の批判を仰いだ（『仏教論叢』第32号，昭和63（1988）年，p.66，『仏教のことは註』（四），1989年p.181，『仏と聖典の伝承』1990，p.54）。そして前記のように，中村元教授からの反論と，藤田教授からの同意を得たところである。(a)説は，最近賛同者を得るようになったが，しかし，なお少数派であるかのようである。

(b)説（信を捨てよ）

わが国で(b)説を定着させたのは，宇井伯寿教授の『印度哲学研究第三』（大正15（1926）年，p.78）の次のような訳文であろう。

「耳あるものの為に不死に至るの門開きたり。

彼等は自己の信仰を捨て去れ。梵天よ。

害あらむを知りて予はこの優良

微妙なる法を人々の間に説かざりき。」

以後この解釈は多くの追従者を生ずることになった。以下問題の一句の解釈（和訳）だけを見てみよう。

「己が邪信を棄てよ」（平等通照『南伝』六，昭和10（1935）年，p.409）

「己が信執を捨てて浄き耳を持て」（干潟龍祥『南伝』九，昭和10（1935年），p.304）

「〔他への〕信を離れよ」（赤沼智善『南伝』十二，昭和12（1937）年，p.237.またp.270に「以前の自分自身の信仰を離れよ，捨てよ」と註記）

「〔己〕信を棄てよ」（渡辺照宏『南伝』三，昭和13（1938）年，p.12）

「（おのが）信仰を捨てよ」（中村元『ゴータマ・ブッダ』法蔵館，昭和33（1958）年，p.120，筑摩書房『世界古典文学全集6 仏典I』昭和41（1966）年，p.25b，『ブッダ 悪魔との対話』岩波文庫1986年，p.87）

「古き信を去れ」（増谷文雄『アーガマ資料による仏伝の研究』昭和37（1962）年，p.265，また「これまでの所信の意。ゆえに「古き信」と訳しておいた」と註記）

「〔他への〕信仰を離れよ」（雲井昭善『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店1967年，p.227）

「汝みずからの信仰を捨てよ」（岩本裕『仏教聖典選第一巻初期經典』読売新聞社、昭和49（1974）年、p.41）

「人びとは自己の盲信を棄てよ」（早島鏡正『ゴータマ・ブッダ』講談社、昭和54（1979）年、p.96）

〔海外における諸説〕

(a)説（信を發こせ）

原始仏教の研究は、西欧において始められた。ここでも(a)説が先行している。Hermann Oldenberg, *Buddha* (1881;13.Auflage, 1959 Stuttgart, p.132) は第二句をこう訳している。

Wer Ohren hat, höre das Wort und glaube (誰でも耳ある者は、その語を聞いて信ぜよ)

また T.W.Rhys Davids と H.Oldenberg との共訳 *Vinaya Texts I* (SBE 13, London 1881) p.88 も

let them send forth to meet it (彼等にそれを受けいれる信を發せしめよ) と訳している。また次に Richard Morris は、Notes and Queries という小論の中の pamuñcati saddham (JPTS, 1885, pp.46-48) という項目の下に、この詩節の解釈について論及し、Sn.1146の解釈とも連動させつつ、

let them who know the truth the faith declare (p.48, 真理を知る彼らに信を表明させよ)

と解している。Otto Franke (ZDMG. 63, 1909, p.7) も mögen zum Glauben gelangen (信を得るように) と解釈する。しかしこのような解釈は、しばらく無視されるようになる。(b)説が行なわれるようになったからである。その後 Aandré Bareau,

Recherches sur la Biographie du Buddha dans les Sūtrapitaka et les Vinayapitaka Anciens De la Quête de L'Éveil à la Conversion de Śāriputra et de Maudgalyāyana (Publications de L'École Française d'Extrême-Orient Vol. LIII) Paris 1963, p.136は

Que ceux qui ont des oreilles manifestent leur foi (saddhā) (耳ある者たちはその信を示すように)

と解して、漢訳の諸例をも訳出している。

(b)説（信を捨てよ）

オルデンベルクやモリスの解釈は、その後、ほとんど顧みられなくなる。そして renounce their empty faith (T.W.and C.A.F.Rhys Davids, *Dialogues of*

the Buddha II. London 1910, p.33),

renounce the faith they hold (Mrs. Rhys Davids, *The Book of the Kindred Sayings I*. London 1917, p.174),

Discard your outworn creeds! (Lord Chalmers, *Further Dialogues of the Buddha I*. London 1926, p.120),

Aufgeben sollen sie ihren Glauben (W.Geiger, *Samyuttanikāya I*. München-Neubiberg 1930, p.217),

let them renounce their faith (I.B.Horner, *The Book of the Discipline (Vinaya-piṭaka)* Vol. IV., London 1951, p.9)

というように、「信を捨てよ」という解釈が多く見られるのである。『大智度論』をフランス語訳したラモット Étienne Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāsāstra)* Tome I, Louvain 1944, pp.60-62は、註記にパーリ原文を挙げて、それに関する従前の諸学者の訳例ならびに漢訳やサンスクリット文の諸例の解釈にも及んでいる。

しかし、その彼はまず「Pamuñcantu saddham は

qu'ils rejettent la foi (彼等は信を捨てるように)

または

qu'ils accordent la foi (彼等は信に従うように)

を意味することができる」という (pp.60-61)。

(2) pamuñcassu saddham (Sn.1146) の解釈

R.モリス前掲論文や、中村元『ブッダのことば スッタニパータ』(岩波文庫・改訳1984) pp.430-431が指摘したように、上引の詩節の解釈のためには、Sn.1146の理解が基礎になる。それはこうである。

yathā ahū Vakkali muttasaddho

Bhadrāvudho Aḷavi-Gotamo ca,

evam eva tvam pi pamuñcassu saddham:

gamissasi tvam Piṅgiya maccudheyyapāram.

『ちようどヴァッカリが〔仏に〕信を寄せていた (mutta-saddha) ように、

またバドラーヴダや、アーラヴィ・ゴータマのように、

まさに同じように君も〔仏に〕信を寄せよ (發せ) (pamuñcassu saddham)。

君は、ピンギヤよ。死〔神〕の領域のかなたに行くであろう。』

実はこの詩節の解釈についても多くの異論がある。それらについては別にふれた(『仏のことば註』(四) pp.175-181)。今は、ただ上の解釈を導いたパーリ

聖典の伝統説にふれておく。上の部分については『小義釈』（*Cūḷaniddesa* = *Nd. II*）がある。いまシャム版の当該箇所（*Syāmaratthassa Tepitakam* 30 *Suttantapīṭake Khuddaka-Nikāyassa Cūḷaniddeso* pp.308⁶-309⁸）の原文と和訳を示しておく。

*yathā ahū Vakkali muttasaddho Bhadrāvudho Ālavigotamo cāti yathā Vakkali mutta-saddho saddhā-garuko saddhā-pubbaṅgamo saddhādhimutto saddhādhipateyyo *arahatta-ppatto, yathā Bhadrāvudho mutta-saddho saddhā-garuko saddhā-pubbaṅgamo saddhādhimutto saddhādhipateyyo *arahatta-ppatto, yathā Ālavigotamo mutta-saddho saddhā-garuko saddhā-pubbaṅgamo saddhādhimutto saddhādhipateyyo *arahatta-ppatto ti yathā ahū Vakkali mutta-saddho Bhadrā-vudho Ālavigotamo ca |*

evam eva tvam pi pamañcassu saddham ti *evam eva tvam saddham muñcassu pamañcassu sampamañcassu adhimuñcassu okappehi, sabbe saṅkhārā aniccā ti | pe | yañ kiñci samudaya-dhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodha-dhamman ti saddham muñcassu pamañcassu sampamañcassu adhimuñcassu okappehīti* *evam eva tvam pi pamañcassu saddham*（下略）

*PTS 本 *Nd. II*. p.228 §512 に arahanta- とあるが、よくない。

『⁽¹⁷⁾《ちょうどヴァッカリが〔仏に〕信を寄せていたように、またバドラーヴダや、アーラヴィ・ゴータマのように》とは、ちょうど（たとえば）ヴァッカリが〔仏に〕信を寄せ、信を重んじ、信を先行させ、信に心を傾け（志向し）、信を主となして、阿羅漢〔位〕に達したように；ちょうど（たとえば）バドラーヴダが〔仏に〕信を寄せ、信を重んじ、信を先行させ、信に心を傾け（志向し）、信を主となして、阿羅漢〔位〕に達したように、というのが《ちょうどヴァッカリが〔仏に〕信を寄せていたように、またバドラーヴダやアーラヴィ・ゴータマのように》〔の意である〕。』

《まさに同じように君も〔仏に〕信を寄せよ（發こせ）》というのは、まさに同じように君も信を發せ（寄せよ）、前に發せ（發こせ）、よく發せ、信仰せよ、信賴せよ。「一切の諸行（身心の勢力、万象）は無常である。…おおよそ何でも集起の属性を有するものは皆な止滅の属性を有する」と、信を發せ（寄せよ）、前に發せ、よく發せ、というのが《まさに同じように君も〔仏に〕信を寄せよ（發こせ）》〔の意である〕。』

ここでは、仏と仏の説かれた言葉（法）に対して、信を寄せ、信を發こすべきことを説いていると解釈される。*Nd. II* に対する註釈 *NdA* やそれとほとんど同文の *SnA* の解釈についてはすでに示した（『仏のことば註』（四） pp.167-168, 176-179）。

（3）パーリ語註釈書類における *pamañcantu saddham* の解釈

さて、最初に掲げた問題の詩節の意味を確認するため、パーリ註釈書の説明をもう一度読解してみよう。ブッダゴーサは、次のように、四書において、ほぼ同文をもって、この詩句を解釈している。

pamañcantu saddham ti *sabbe attano saddham pamañcantu*⁽¹⁾, *vissajjentu*⁽²⁾. *Pacchima-pāda-dvaye ayam*⁽³⁾ *attho : Aham hi attano paṇaṇaṃ suppvattitaṃ pi imaṃ paṇitaṃ uttama-dhammaṃ kāya-vācā-kilamatha-saññi hutvā*⁽⁴⁾ *na*⁽⁵⁾ *bhāsim*; ⁽⁶⁾*idāni pana sabbo jano saddhābhājanaṃ upanetu: puressāmi nesam saṅkappan*⁽⁷⁾ *ti* (*Sp. V. p.963*¹⁸⁻²², *Sv. II. p.471*¹⁰⁻¹⁶, *Ps. II. p.181*²³⁻²⁸, *Spk. I. p.203*⁶⁻¹¹)

(1) *muñcantu Sv.*

(2) *vissajjantu Sp., Spk.*

(3) *ayam ev'attho Sp.*

(4) *hutvā manujesu devamanussesu Sp.*

(5) *nābhāsi Sp., nābhāsim Spk., n'abhāsim Sv., na bhāsim Ps.*

(6) 以下を欠く *Sp.*

(7) *saṅkappan'ti Sv.*

『（一）〈信を發こせ（寄せよ）〉とは、皆、自分の信を發こせ、置け（寄せよ）。』

（二）最後の二句にはこの（以下の）意味がある。なぜなら、私は⁽¹⁸⁾、自分の〈よく知っている〉（*paṇaṇa*）、よく思いめぐらし（理解し）ている（*suppvattita*）〔法である〕けれども、この〈すぐれた（微妙な）〉最上の〈法（教法、真理）〉をば、〔自分の〕身・口の疲労を〈想って〉いて〔人々に即ち神々や人々に *Sp*〕〈説かなかったのだ〉。

（三）ところが、今やすべての人々は信の器（*saddhā-bhājana*）を捧げ（向け）よ。〔私は〕彼ら（人々）の思いをかなえよう（満たそう）と。』

この中（一）の文もよく理解されて来なかった。リス・デヴィズ夫人（*The Book of the Kindred Sayings* I.p.174脚註）は

Let them all give up (*vissajjantu*) their own faith (*saddham*)

と訳しているし、ラモット (*Le Traite de la Grande Vertu de Sagesse* I.p.61) も

que tous rejettent, c'est-à-dire expulsent leur [ancienne] foi à eux (皆彼らの〔古き〕信を捨てるように、いわば排除するように)
と解している〔このような誤解から(b)説が由来しているのである〕。しかし次の(三)の文からは、そのように解すべきでないことがわかるであろう。「信を寄せよ」(信を發こせ)と言うからこそ、「信を捧げよ」とも首尾一貫するのであって、「信を捨てよ」と言ってから、「信を捧げよ」というのは矛盾するからである。また第三句の解釈も(二)に従うと、前掲拙訳の如くなるはずである。

(4) サンスクリット文と漢訳の併行例

上掲のパーリの詩節の解釈は示した。これと併行するサンスクリット文や漢訳例を検討して、この詩節の伝承の過程について考えたい。

Mahāvastu (=Mv) III.319³⁻⁷にはこうある。

apāvṛtaṃ me amṛtasya dvāraṃ
brahmeti bhagavantam ye śrotukāmā
śraddhāṃ pramuṃcantu viheṭhasaṃjñāṃ |
viheṭhasaṃjño pragaṇo abhūṣi
dharmo aśuddho Magadheṣu pūrvam ||

『不死(甘露)の門は私によって開かれた。

梵天よ。ゆえに、およそ世尊〔のことばを〕聞こうと欲する者たちは、
信を發こせ。加害の想いを〔離れよ〕。

加害と呼ばれる不浄なる法(主義)が

かつてマガダ〔国〕にあって、〔私には〕よく知られていたのだ⁽¹⁹⁾。』

上の原文の後半は難解であり、その三行目に問題がある。英訳(J.J.Jones, *The Mahāvastu* vol. III. p.308)は shed the faith that is based on a harmful idea (有害な考えにもとづく信を去れ) と訳している。śraddhāṃ をば viheṭhasaṃjñāṃ と同格と見ると、どうしても、そういう意味に解さざるを得ないのであろう。しかし上来、śraddhā (信) が信頼を原意とし、心の澄浄を特相とすることを考慮すると、「加害の想いにもとづく信」ということは、理解しにくい。そこでいまは上のように試訳を示した。しかし原文の脚註を見ると、多くの異読があり、テキストの構成そのものに問題があると考えられる。中でも、śraddhāye muṃ° という異読がある。この読み方は採用できる。これに

よれば「信のために加害の想いを離れよ」と解されることになる。必ずしも、「信を捨てよ」と理解しなければならないのではない。

東トルキスタン北道(Murtuq, Šorčuq, Qizil, Tumšuq etc.) から発掘された写本断簡を E.Waldschmidt が復元した *Das Catuṣpariṣatsūtra* (=CPS, Berlin 1952, 1957, 1962) 8.17 (I.pp.29, 44, II.p.118, III.p.442) には、こうある。

avāvariṣye amṛtasya dvāraṃ
ye śrotu-kāmāḥ pramodantu śraddhāḥ |
viheṭha-prekṣi pracuraṃ na bhāṣe
dharmaṃ praṇītaṃ manujeṣu brahman
『〔私は〕不死(甘露)の門を開こう。
およそ聞こうと欲する信有る者たちは歎べ。
〔自らの被〕害を思いつつ微妙なる法を
人々に広くは説かない。梵天よ。』

これに相当する漢訳例は、龍樹(Nāgārjuna)の『大智度論』卷一(『大正』25, 63a)の次の偈である。(榎本文雄、前掲論文p.17に指摘されている⁽²⁰⁾)。

我今開甘露味門 我れ今甘露味の門を開く。
若有信者得歎喜 若し信有る者は歎喜を得ん。
於諸人中説妙法 諸人の中に於いて妙法を説くは、
非悩他故而為説 他を悩ますが故に而して為に説くには非ず。

龍樹は、仏經の最初に説かれる「如是我聞」の如是を解するにあたって

仏法大海信為能入 仏法の大海は信を〔もって〕能入となす
といつて、仏法(仏の教法)に入るには、信がなければならぬと説いて、その根拠として、梵天勧請の段を引き、この偈を引用したのである(これは藤田前掲論文巻頭に指摘する通りである)。

『四分律』卷32(『大正』22, p.787b)には

梵天我告汝 今開甘露門 梵天よ。我れ汝に告ぐ。今や甘露の門は開かれたり。

諸聞者信受 不為娘故説 諸の聞く者は信受せよ。娘の為の故に、
梵天微妙法 牟尼所得法 梵天よ。微妙の法、牟尼の得しところの法をば、説かざりき。

とあって、「信受せよ」と読むことができる。『長阿含』卷一、「大本經」(『大正』1, 9.8c)には、過去の毗婆尸仏の事蹟として同様の話を伝えており、そ

こには散文の形ではあるが同趣の文がある。すなわち

吾_レ愍_二汝等_一 吾_レれ汝等^{あわ}を愍_レれむ。
 今_レ當_二開_レ演_二甘露法門_一 今_レまさに甘露の法門を開演すべし。
 是_レ法深妙難_レ可_レ解知_一 是_レの法は深妙にして解知すべきこと難_レし。
 今_レ為_二信受樂_一聽者_一說 今や信受し聽くことを樂_レう者の為_レに說_レかん。
 不_レ為_二觸擾無_レ益者_一說 觸擾し益無き者の為_レには說_レかず。

とある。「信受し聽くことを樂_レう者の為_レに說_レかん」というところは、パーリと一致しないが、信を前提としている点に注意したい。

『增壹阿含』卷10（『大正』2, p.5938）には次のような偈が出ている。

梵天今來勸_二 如來開_二法門_一 梵天今來たりて、如來に法門を開かんことを
 勸めたり。

聞者得_二篤信_一 分_二別深法要_一 聞く者は篤信を得て、深き法の要を分別せよ。
 猶_レ在_二高山頂_一 普觀_二衆生類_一 なお高山の頂に在るがごとく、普く衆生の類
 を觀じて、

我_レ今有_二此法_一 昇_二堂現_二法眼_一 我_レれ今此の法有り、堂に昇りて法眼を現ぜん。
 とある。後半の二行はパーリに一致しないが、第三句「聞く者は篤信を得て
 (または得よ)」はパーリに近い。

ところが、『五分律』卷15（『大正』22, p.104a）には

先恐_二徒疲勞_一 不_レ說_二甚深義_一 先には徒らの疲労を恐れて、甚深の義を說か
 ざりき。

甘露今當_二開_レ一切皆應_一聞 甘露今まさに開くべし。一切皆まさに聞くべし。
 とあって、信の語を含まない。しかし、「信をすてよ」という示唆もない。

上の CPS の偈の第二句の pramodantu śrāddhāḥ（信有る者たちは飲べ）を
 praṇudantu kāṅkṣāḥ（諸の疑いを払い除けよ）と改めた偈が『根本説一切有
 部毘奈耶破僧事』に当たるサンスクリット本 *The Gilgit Manuscript of the*
Saṅghabhedavastu (=SBV, R.Gnoli ed., Roma 1977, 1978) I. p.130⁸⁻¹¹
 にある。

apāvariṣye amṛtasya dvāraṃ
 ye śrotukāmāḥ praṇudantu kāṅkṣāḥ
 viheṭhaprekṣi pracuram na bhāṣe
 dharmam praṇītam manuṣeṣu brahman || (cf. CPS. III. p.442¹⁻⁴)

『〔私は〕 不死（甘露）の門を開こう。

およそ聞こうと欲する者たちは、諸の疑いを払い除けよ。

〔自らの被〕 害を思いつつ微妙なる法を

人々に広くは說かない。梵天よ。』

これはパーリの pamuñcantu saddham（信を發こせ）を praṇudantu kāṅkṣāḥ
 (諸の疑いを払い除けよ) と改めた形でもある。

これに相当する『根本説一切有部毘奈耶破僧事』卷6（『大正』24, 126c）には
 若有_二於_レ法深樂聽_一 若し法を深く樂_レて聽くもの有れば、
 我_レ即當_二開_二甘露門_一 我_レれは即ちまさに甘露の門を開くべし。
 如_レ其譏慢_一自輕_レ人 其の如く譏_レり自ら慢_レじ人を輕_レずるものに、
 大梵我終不_レ為_二說_一 大梵よ、我_レれは終に為_レに說_レかず。
 とあり、「法を深く樂_レて聽く」という語が、信を示唆している。なお、これ
 に相当するチベット訳 (CPS. II. p.119) は上の SBV とほぼ同意である。

『衆許摩訶帝經』卷7（『大正』3, pp.953a）には

我_レ今降_二法甘露雨_一 我_レれ今法の甘露の雨を降らし、
 當_レ潤_二樂聞及一切_一 まさに樂_レて聞くもの及び一切のものを潤すべし。
 從_レ此人間得_二法因_一 此れより人間、法を得るの因あり。

若_レ見_二弊魔_一不_レ廣_二說_一 若し弊魔を見れば広くは說かず
 とある。「樂_レて聞く」という文は、人々の信を前提にしている如くである。

Lalitavistara (=LV) p.400¹⁸⁻¹⁹にはこうある。

apāvṛtās teṣām amṛtasya dvārā brahman ti satataṃ ye śrotavantaḥ |
 praviśanti śraddhā na viheṭhasaṃjñāḥ śṛṇvanti dharmam Magadheṣu
 sattvāḥ ||

『彼等に不死（甘露）の門が開かれた。梵天よ。故に常におよそ誰でも耳
 あるものたちは信じて〔不死の門に〕入るが、害の想いはない。〔その〕マ
 ガダ〔国〕における衆生たちは法を聞く⁽²¹⁾』

第一句を除けば、パーリに一致しない。漢訳とも一致しない。が、「信を捨て
 よ」という文脈でないことは確認できる。

その漢訳にあたる『方廣大莊嚴經』（『大正』3, p.605a）には

我_レ今為_二汝請_一 當_レ雨_二於_レ甘露_一 我_レれ今汝の請いの為_レに、まさに甘露を雨ふ
 らすべし。

一切諸世間 天人龍神等 一切の諸の世間、天・人・龍神等

若有_二淨信_一者 聽_二受如_レ是法_一 若し淨信有らん者は、是の如き法を聽受せよ。

とある。「若し淨信有らん者」という文は、信を發こすのを予期している。

以上、これらの併行例のどこにおいても、「信を發こせ」とは述べても、「信
 を捨てよ」と述べていると解釈しなければならない例はない、と要約される。

五 む す び

以上によって、「信を發こせ」という解釈には、何らの疑問がないこと、「信を捨てよ」という解釈や主張は、インド仏教（原始仏教、部派仏教、大乘仏教）においては成立しないことが、確認できたと考える。したがって「信を捨てよ」という原意が、後になって信を強調するために、「信を發こせ」という解釈に変更された、というような想定⁽²²⁾も成立する余地がない。これによって人々が信を發こし信頼を寄せることを予想して、仏が説法を決意された（*Vin. I. p. 7 etc.*）ということ、そしてまた信を發こすことによって、〔死（神）〕の領域を越える（*Sn.1146*）、つまり解脱を得、寂滅（涅槃）に到る、ということも、原始仏教聖典に説かれている、と確認されたのである。

「最初期の仏教は〈信仰〉（*saddhā*）なるものを説かなかった⁽²³⁾」、ということにはならないのである⁽²⁴⁾。

註

- (1) H. Oldenberg, *Buddha* 1881以来、わが国では姉崎正治『法身仏と現身仏』明治37（1904）以来、最近の中村元教授、前掲書（1992）にいたる。
- (2) Köhler前掲書について原実教授の書評（*IJJ. Vol. 19, 1977*, pp. 105-108）は有用である。また同教授の *Note on two Sanskrit Religious Terms Bhakti and Śraddhā*, *IJJ. Vol. 7, 1964*, pp. 124-145は、古典文学の用例を多く網羅している。また同教授の「*Bhakti* 研究」（『日本仏教学会年報』第28号、昭和37年度、横pp. 1-24）も、有用である。同教授によると *śraddhā* の対象は知的、客観的なものであり、*bhakti*（信愛）は情緒的、主観的感情であり、前者は後者に先行すると（pp. 20-21）。また前掲『仏教思想11 信』の中の中村論文、松濤誠達「古典インドにみる信仰」も参考になる。
- (3) 松濤前掲論文p. 233は、*śraddhā* が人に向く（*upav√nam*, *Baudh. ŚS. 2. 12*）、入る（*ā√viś*, *Kath. 1. 2*）、という用例から *śraddhā* は「外界から向かってくる、乃至、入ってくるものであると考えられていたことが推察できよう」という。このような *śraddhā* は人心に入ってくる神格のようである。
- (4) LA. = Lassen's Anthologie (Gidd. Bill. 48) とある（*PW. I. p. x*）が、筆者未見。
- (5) *chraddhayā-āhutam* を省くテキストがある（J. Hertel, *Muṇḍaka-Upaniṣad*, Leipzig 1924, p. 56）。しかし同p. XV Ⅲには前掲の通りの文が示されている。
- (6) 原前掲論文 *IJJ. 7* p. 141 はもっと多くの資料を挙げているが、今主な例を選んだ。

- (7) 中村前掲論文（『信』）p. 6にも和訳文が載せられている。同p. 9註(4)には、カタカ樹の学名は *strychnos potatorum* ということある。E. J. H. コーナー・渡辺清彦『図説熱帯植物集成』（広川書店、初版昭和44年、第4刷 昭和61年）p. 631には、渡辺博士によるスケッチの下に、英語 *clearing nut tree*, 和名ミズスマシノキ、「小木、有毒成分はないが種子の粘液は水中の塵を沈澱させるので汙過水の飲料化に用いる」とある。
- (8) *ĀnSS* 51, 卷末の附録p. 1. 宇井伯寿『印度哲学研究第四』pp. 429-430参照。
- (9) 底本は實。㊤は寶。後者による。
- (10) 底本は實。㊤は寶。後者による。
- (11) 桜部建『仏教語の研究』（文栄堂書店、昭和50年）p. 139に、これに相当するチベット訳（東北No. 4097）の和訳文が出ている。
- (12) 『華嚴經』（六十卷本）卷44, 45, 49（『大正』9, pp. 681c¹⁰, 688a²⁶, 710b⁷）。仏または菩薩は浄水珠に喩えられる。
- (13) 村上真完・及川真介『仏のことは註』（一）p. 339にこの前後の和訳を示した。
- (14) 水野弘元『南伝』64, p. 54に *Vism. p. 464* の和訳がある。佐々木現順『仏教心理学の研究』（昭和35年）p. 268に *As. p. 120* の和訳がある。
- (15) このような趣旨は、榎本文雄氏からも伺ったように思う（平成4年9月8日、仏教大学において）。ただし、信じない（*assaddha*）ということが、悪い意味にだけ用いられるわけではない。（cf. *Dh. 97, Sn. 853*。）本稿末の〔補記(2)〕参照。
- (16) 以下は『仏のことは註（四）』pp. 175-189の趣旨に、若干の変更と加除を施したもの。
- (17) 水野弘元『南伝』44, p. 374に和訳がある。
- (18) 以下の解釈は『仏のことは註』（四）p. 184 l. 18の「自ら熟知の有用な〔法〕であっても、…」を今、少し改めた。
中村元教授は *paṇa* を「いみじくも」と訳す（前掲書 pp. 449, 463註 (35)）。「正しい（まっすぐな）…〔法〕」の意でもよいのかも知れない。今は「熟知されている」「よく知られている」の意と考える。*suppavattita* は、文字通りには、「よく転ぜられた」。しかし未だ外に向かって法輪は転ぜられていないのだから、心の中で「法がよく転ぜられている」ということであろう。つまり心の中で法がよく思いめぐらされ、よく理解されている（自分が法をよく理解している）ということと考えられる。
- (19) *pragaṇa* を *'pragaṇa* (*apragaṇa*) と改めて、「悪い…法」とする解釈がある。J. J. Jones の英訳 *The Mahāvastu Vol. III*, p. 308はこの後半を *For already there has arisen in Magadha a doctrine that is impure, based on a harmful idea, and wrong* と訳している。彼は実は E. Lamotte (*op. cit. I. p. 60 n. 1*) に従っているのである。今は Pāli の *paṇa* の解釈に合わせておく。

②0 榎本氏はプラークリット形 *pamoyamtu を *Vin* や *Mv* は $\text{pra}\sqrt{\text{muc}}$ と解釈し、*CPS* は $\text{pra}\sqrt{\text{mud}}$ と解釈したのだと推定する (p.18)。そうかも知れない。

②1 筆者は先に「…耳ある者は信に入るが、害の想いに〔入ら〕ない」(『ブッダのことば註』(四) p.186¹²⁻¹³と訳したが、今改めた。

チベット訳 (*D.* No.95, *Kha*151b⁷; *P.* No.763, *Ku*216a⁸) には、こうある。

『梵天よ。およそマガダの衆生が (tshaṇṣ-pa ma-ga-dhaḥi-sems-can gaṇ |) 耳あり信をもっているなら (rna-ba-ldan shiṇ dad-daṇ-ldan gyur-la |) 加害しない想いをもち常に法を聞くから (mi-ḥtshe ḥdu-ṣes rtag-tu chos ṇan-bas |) 彼らには甘露の門が開かれた (de-tag-la ni bdud-rtsiḥi sgo phyeho |)。

②2 中村元『ブッダ悪魔との対話』(岩波文庫, pp.337-338), 『ゴーマ・ブッダ』 I (決定版) pp.461-462は、榎本氏の集めた資料を用いながら、

「極めて古いサンスクリット仏典『マハーヴァストゥ』では「信仰を捨てよ」

となっていると言って *Mv* の文を引用してから

「ところが、それ以後の典籍では「信仰ある者は喜べ」と改められている」

として、以下に *CPS*, *SBV*, *LV* と『大智度論』巻1の文を列挙した後

「これらの対比から考えてみても、「信仰を捨てよ」と説いている『サンユッタニカーヤ』第一篇の説は、最初期の思想を伝えていることは、疑いない」

と言い切っている。しかし、中村教授が挙げたパーリ原文は「信仰を捨てよ」と解すべきではなく、「信を發こせ」(寄せよ)と解されること、*Mv* の相当文は必ずしも「信を捨てよ」と解するに及ばないことから、上記の中村元説は成立しない。

②3 中村元『ブッダのことば』(岩波文庫, 1984年版) p.431。

②4 袴谷前掲書 p.318は、平川彰教授の示唆に従って *PTSD saddha*² の解釈 (a funeral rite, *saddhaṃ pammuṇcati* を to give up offerings と訳す) を紹介している。*saddha* (*Skṭ.śrāddha*) は「祖霊祭」を意味する (*A.V.* p.269⁶)。しかし今の *Vin.* I. p.7等の文脈に適すとは考えられない。また *Sn.* 1146の *pamuṇcassa saddham* を「葬祭を放棄せよ」と解すべきであると田中教照「インド仏教における信」(『淳心学報』第8号, 平成2年, 筆者未見) が書いていることを、藤田宏達教授(『信』p.104) が紹介した。このような解釈は *Sn* の文脈とも合致しないし、パーリの伝統説とも合わないの、藤田教授と同様に、筆者もこの説には賛成しない。初期の仏教が、信者の葬祭等に容喙したようなことは、非常に疑わしい。

〔付言〕筆者は中村元先生の御研究に端緒を得て、この小稿をまとめるを得た。文中、先生の御主張を批判し、それを却ける議論を展開してきたので、内心失礼に及んだのではないかと慮れる。思えば中村元先生は、角界に喩えるなら、さしづめ、横綱を長年努

めておられる偉大な存在であり、筆者はその胸をお借りして稽古をつけてもらって上達を期する下位の力士の如く、金星をあげることによって、「恩返し」をしたいと願うと申上げて、御海容を乞う次第である。(平成4年11月25日成稿)

〔補記(1)〕本稿脱稿後に出た阪本(後藤)純子『梵天勧請』の原型(『印度学仏教学研究』第41巻第1号, 平成4年12月, pp.474-469)は、問題の文句を「信仰を發せよ」と解し、*Mv* の相当句を「害意ある信仰を捨てよ」と訳し、これを「Pāli の如き原形から二次的に崩れたもので、再解釈されたのであろう」と見做している。

〔補記(2)〕*Dh.* 97 (= *Nd.* I. p.237³⁻⁴ = *J.* III. p.78¹⁷⁻¹⁸ = *DhA.* II. p.187¹⁶⁻¹⁷) には次のようにある。

assaddho akataññū ca sandhi-cchedo ca yo naro |

hatāvakāso vāntāso sa ve uttama-poriso ||

これに相当するサンスクリット文は、*Udānavarga* (F. Bernhard ed., Göttingen 1965) 29.23 と *Abhidharma-Samuccaya* (P. Pradhan ed., Santiniketan 1950, A と略) とに、こうある。

aśraddhaś cākṛtajñāś ca saṃdhi-cchettā (-chedī A) ca yo naro |

hatāvakāso vāntāśaḥ sa vai tūttama-pūruṣaḥ ||

Dh. 97 について K. R. Norman, *Dhammapada 97: A Misunderstood Paradox* (*Indologica Tauriensia* vol. VII, 1979, pp.325-331) は、*DhA.* が解するような善意味の外に、*Dh.* 97 は悪い意味をも含む śleṣa (一語に相反する二義を盛る修辭法) であるという。藤田宏達教授(『ブッダの詩 I』講談社, 昭和61年, pp.22, 385注) はその両義を示した。最近、原実教授 (Minoru Hara), *A Note on Dhammapada 97 (IIJ. Vol. 35, 1992, pp.179-191)* は Norman 説を追認しつつ、*Abhidharma-samuccaya-bhāṣya* (N. Tatia ed., Patna 1976, pp.155²³-156⁵) と玄奘訳『大乘阿毘達磨雜集論』巻16(『大正』31, p.773b) の所説を解明し、『法句経』(『大正』4, p.564b¹¹⁻¹²)、『八健度論』(『大正』26, p.916a)、『出曜経』(『大正』4, 750c⁴⁻⁵) 等漢訳の諸例を検討し、最後に *porisa* (*pauruṣa*) の意味を古典文学の諸例に即して考察し、*uttama-porisa* は the highest person (最上人) の外に、the man of extreme audacity (甚だ厚顔大胆な人) を意味すると論じている。以上を参照しつつ *Dh.* 97 を解すると、次のようになる。

(a) 『信ずることなく、恩知らずで、〔家の〕隙間を破り (= 押込み強盗をし、又は約束を破り)、〔妄言を吐いて集会にうけ容れられる〕余地 (又は好機) を失い、〔人の〕反吐を食う人、それこそ最高の厚顔大胆な人だ。』

(b) 『他を信ずることなく、作られないもの (涅槃) を知り、〔輪廻再生の〕結びつき

を断じ、〔再生の〕余地を破り、願望を吐き出した人、それこそ最上の人だ。』

(a)は玄奘訳の

不_レ信_ニ知_レ恩_ヲ 断_ニ密_ニ無_ニ容_ニ処_ニ 恒_ニ食_ニ人_ノ所_ヲ吐_ニ 是最上丈夫（信ぜず恩を知らず、密を断じ容れらるる処無く、恒に人の吐く所を食う。是れ最上の丈夫なり。『大正』31, p.773b.なお「密を断じ」とは、釈文によると、「窃盗を行じて牆密の処を攻む」、つまり窃盗をし、堀・垣を破って押込み強盗をする、の意という。他方また、この四句一偈の解釈も転じて、上の(b)とほぼ同様の意味にもなるのだという)

と大体等しい。(b)は *DhA* に従った。Norman は悪い意味(b)が原意で仏教以前に遡ると示唆する。またこの *assaddha* と *Sn.* 853 の *na saddho* は without desire (欲がない) の意であるともいう。これは「自身が証得した法を〔信じ〕、誰の〔法〕をも信じていない」(*sāmaṃ adhiḡataṃ dhammaṃ na kassaci saddahati*, *SnA.* II.p.549³⁹) とは一致しないが、一考の余地があるだろう。

DhA III. pp. 186–187 も *Nd.* I. pp. 236–237 (ad *Sn.* 853) も *S.* V. pp. 220–221 を予想し、舍利弗のように自ら悟った者は、仏を信ずるが故に信根等を修すれば不死に入ると知るのではなく、悟らない者が他を信ずる故にそうに知るのであろう、と述べてから *Dh.* 97 を引く。信じないということが、悟った者にあつてこそ、問題にはならない、が Norman もいう通り信が無用だということではない。「信を捨てよ」というのではない。

(1/13, 1993)

The Transmission of the New Material Dharmapada and the Sect to which it Belonged

Takayoshi Namikawa

(Associate Professor, Bukkyō University, Kyoto)

Chapter I

What I call the new material Dharmapada (PDhp) is the text which Rahula Samkrtyāyana discovered in the Nor Monastery in Tibet. Samkrtyāyana photographed the text, and these photographs are now preserved in the Bihar Research Society in Patna. N.S. Shukla (S ed.)¹ and G. Roth (R ed.)² published annotated editions in 1979 and 1980 respectively. In 1989, M. Cone (C ed.)³ compared these two earlier editions and published a revised edition.

Since the S ed. and R ed. were published, various scholars have worked on the text.⁴ In general, however, these researches have focused on textual criticism, grammar or word inflections that are particular to PDhp. These scholars have attempted to compare the language of PDhp with other texts in order to clarify the date and the location of its composition and to determine the sect to which it belonged. Although these researches have proved fruitful in the fields of textual and linguistic studies, they have not led to a fully satisfactory treatment of the text. Recently M. Cone has turned her attention to the inscriptional evidence, but since the linguistic correlation between the inscriptions she studied and the text is not close, she has not yet achieved any positive results.

In this article,⁵ as a means to solve the above mentioned problem, I would like to use several inscriptions that can be linked to specific locations and dates. By comparing their linguistic characteristics with the PDhp, I intend to discuss the transmission of the text and the sect to which the text belonged.

佛 教 研 究

第 22 号

平成 5 年 3 月

国際佛教徒協會